

二人の先生の教え

村上市立岩船中学校 3年 坂上 舞

「怒られるからやるのではなく、楽しいからやってほしい。」

この言葉は、私の所属している吹奏楽部の顧問の先生から出たものです。

顧問の先生は、普段から穏やかな表情をしていてめったに怒ることはありません。私は以前に次のような質問をしたことがありました。「先生が怒らないからといって音楽の授業時間にふざけたり、真面目に取り組まなかったりした生徒がいたそうですが、どうして怒らなかったのですか。」「一度怒れば、静かになるのではないですか。」と。

そこで返ってきた言葉が、先程の言葉でした。怒られるから嫌々やるのではなくて、自分から楽しんでやってほしいという先生の思いが込められた言葉だったのです。私は音楽が好きだから常に楽しんで取り組めていて気にかけてはなかったのですが、考えてみると、強制されて嫌々受ける授業よりも、心から楽しいと感じながら受ける授業の方が、その人にとって大きな意味があるのではないかと考えさせられました。

では、厳しく叱ることがダメなのかといえばもちろん違うと思います。厳しくされることで気付くこともあるのです。

私は自ら率先して行動することが苦手です。周りの人が行動するのを見てから動き出したり、人から事前に言われていないと動けなかったりと積極性に欠けてしまう部分もっています。そんなある日、学級レクをすることになりました。私はどうせ役に立たないだろうと勝手に思い込んで、積極的には活動に参加しませんでした。私と同じように考えていた人が他にも何人もいて、その人たちも私と同じようにあまり楽しくなさそうでした。せっかくの学級レクが何となく終了したような感じがしました。

教室に戻ると、私たちは担任の先生から厳しい言葉を投げかけられたのです。

「幸福や楽しみは自分でつかみにいくもの。どんなことにおいても自ら積極的に楽しめない今の状態では、一体、後輩の誰がついてくるの。」と叱られました。これから体育祭などの行事があります。私たち三年生が後輩を引っ張っていかなければなりません。私は、後輩たちと精一杯に活動して一緒に楽しみたいと思います。だから、後輩たちが「自分は役に立たない」「つまらない」などと感じ、やる気の出ない姿を見るのは嫌です。でもそれよりも、そんな後輩たちの姿勢を私たちが作り出すのはもっと嫌だと感じました。私たちの行動が後輩に影響を与えるのならば、もっと先輩らしく振る舞い、まねされるような人にならなければならないと強く思いました。

厳しく叱られることによって何か大切なことに気付くこともあります。担任の先生は、「私たちに足りない何か」を気付かせるために叱ってくれたのではないかと思います。

顧問の先生、担任の先生が私たちに接してくださる姿は、一見すると、私には正反対のことをされているようでした。でも実はそうではなかったことが今は分かります。私たちが何か大切なことに気が付くのを待ってくださる顧問の先生。一度大切なことに気付かせて、その後の行動を見守ってくださる担任の先生。どちらの先生からも私たちが自主的に行動することを優先してくださっているのが伝わってきます。

きっと二人の先生が私たちに伝えたいことは、自ら積極的に行動するということ、つまり「自主性」なのではないでしょうか。自主性を磨いて楽しみを得ることが、自身の幸福につながると思います。何事も自分で行動することは得られるものが多いので、結果に関わらず楽しいものです。そうして得られた楽しみは、次への挑戦の糧になります。だから、私はそんな「楽しみ」が得られるように、自主的に行動することを大切にこれから生活していきたいです。